

## 回顧

資料提出 近藤 香代

平成十年二月吉日

### ★御座船 (鳥出神社所有)

この御座船は天明元年(1781)の奉納と伝えられている。又この年より鯨船神事が始まったといわれている。

(鳥出神社畧誌より)

往古の捕鯨を神事としたもの、捕鯨の賛美は筆舌に尽くしがたく、唾然たらしむべし、荒海に鯨追う所作をなす様は、豪快海国民の本領を發揮して偉観なり。

## 回顧(特別寄稿)

☆ 対象十年頃から終戦までの富田いろいろ(思い出すままに) ☆

近藤 香代

大正六年十月二十一日生まれの一老女の産まれた富田の旧き良き時代を、思い出すままに綴ってみます。

私、富田小学校の北側、今の中央通と旧道との十字路南角(今の山口化粧品店)の所で産まれました。北は花の木の川、旧道から堤防を上がり現在の四日市高校へ行くお琴の橋のすぐ上は、舟板を二三枚並べて、近くの女たちの団らん所、洗濯場になっていて、一日おしゃべりの絶えない噂話の交換所になっていました。

旧道をはさんで東に下ると喜月があり、日中は芸妓の三味の稽古が聞こえ、のんびりした街でした。前は床屋、隣はうどん屋(東京庵)で、茶屋町通りと呼ばれていました。

明治の末頃に四日市の南町から来た父は、この地で印判屋を始めました。後に印刷もするようになり、当時の印刷機は明治村に残されています。

幼いころの出来事で覚えているのは、今の中町にある稲荷さんの火事のことです。お稲荷さんへは花の木の川の舟板の橋をわたって行くようになっていましたが、自宅にいた母が二階の西窓から火事を見つけ、階下にいた父に知らせました。父は足袋はだしで飛んでいったそうです。稲荷の森から、白い煙が上がっていたのを覚えています。

大正四年の御大典に、父のアイデアで張りぼての「大鯛」を作って祝いましたが、これが町中の話題になり、鯛の祭車を作るきっかけになりました。素人の父が設計をし、寄付を集めて屋大工の間野清治氏に作らせることになり、父は、現在妙蓮寺が建っている所にあった作業小屋へ毎日通いました。一日作業所において、夜は店の仕事をする。寝てからも天井に設計図を張って考え込んでいる。母は、いつ寝るのだろうと思っていたそうです。

大工賃を払えば寄付金だけではまなりません。他町の応援者からも寄付を仰ぎましたが、作業はなかなか進みません。その内、寄付を使い込んでいるとか、素人なのでモノにならないのではといったことを言う人も出てきました。

父は、名古屋の人形師玉屋庄兵衛の所へ行くのも自分持ちでまかなっていただくのですので、そんなことを言われるのなら、明日から店を閉めてでもやると言っ、職人（藤造）を雇って店の仕事をさせ、自分は専ら作業小屋通い。この小屋には飴売りが住んでいて、頭の上に半切を乗せ、太鼓を叩いて売り歩くのです。雨の日は売りに出られないので、飴づくりと太鼓の稽古。何人位いたのか、朝から太鼓の音がするので、太鼓町と呼ばれていました。

大正10年のお盆にやっと間に合って、町の人たちが張り切って祭車を引いていたことを覚えています。他町にもない立派な祭車が来たので、石取りも鯨船も良くなったと言われ、この年のお盆は大変な賑わいだったようです。ちりめんの半てんに花笠で、祭車を引いている写真が今も残っています。

旧東街道が往還と言われていたその頃、物資は桑名から四日市へと流通していました。夜明けとともにシジミ蛤売り、朝日からはみがき砂売り、そして朝明の水売りが毎日のように来て、飲み水に買いました。十時ごろになると「パンパン、あんパン」とチリンチリン鈴を鳴らしながら、板車にガラスケースを乗せたパン屋が来ました。途中で売り切れになっても、私の分だけは一つ残して来てくれたそうです。

やがて牛乳屋がガラスびんをガチャガチャいわせながら、箱の車でやってきます。午後になると川原町のマル五呉服店が、板車に荷物をつけて小僧に引かせ、番頭がついて売りに来ます。

旧東街道は商いの道であり、毎日の生活に欠かせない道でした。ある日、板車に箱を乗せて引いていく牛を見ました。あの牛は帰りにはあの箱に乗ってくるのだと母は言いました。川島か高角へ行くのでしょうか。子ども心にかわいそうにと思いました。

家の裏に出ると一面田んぼで、鵜まで見渡すことが出来ました。斎宮山の裾に転々と火が並ぶ小雨の夜、あれは狐の嫁入りだと母が言ったほどののどかな町でした。

大正十年の台風はきつかったようです。台風が過ぎて四日市祭見物に浜街道を乳母車に乗せてもらって出かけました。途中、犬か豚か分からないが何か白い動物が海岸に打ち上げられていたのを覚えています。霞ヶ浦か午起辺りだったと思います。

季節になると伊坂山へ松茸狩りに行きました。また祖母に連れられて十四堤へもおにぎりを持ってよく行きました。十四堤は鵜から十四へ来て、今の街道のように東へ下っていましたが、その頃は山へ遊びに行くように思っていました。後で十四堤と分かったのですが、高い堤で、その下に大矢知へ行く細い道がありました。富田は、間の宿で、のんびりとした雰囲気でした。

大正十年の秋から、今の所（中町）へ新築を始めました。田んぼを埋め立てて建てたのですが、その土は斎宮山から板車にふごを並べて運んできました。

十一年の春、新しい家へ引越しをしました。家から北は東洋紡まで田んぼばかりで、前田医院の所に富田の火葬場がありました。夜まで燃えていることもありそのような日には母は早く雨戸を閉めてくれました。大官庁の三重職布のマークである木兎の目もよく光り、裏の寺の森では夏になるとふくろうもなっていました。

静かな町並みにあった豊富座に芝居があるときは、カラコロと下駄の音や話し声が、大潮で川が満ちてくると道路に上がった川水の中をザバザバと帰る音がよく聞こえました。

大正十二年の関東大震災は、昼御飯の最中のことで、東のほうからゴーという地鳴りがして、グラグラと来ました。私は父に、妹は母におぶわれて外へ出ました。その頃はラジオも無く、チリンチリンと腰に鈴をつけた配達人が配る号外が頼りでした。

一週間ほど経って、愛国婦人会が富田の駅前にテントを張って、被災地から逃れてきた人たちに湯茶や軽食の救援活動をしました。一週間ほど続いたと記憶しています。

十三年に小学校へ入学しました。四月八日が入学式、袴をはいていったのは私だけでした。十四年は、何事も無く過ぎましたが、十五年、冬休みに入った二十五日に大正天皇が崩御されました。新聞の号外で知らされ、学校からは上級生が午後登校するようにと知らせに来てくれました。

昭和元年は 1 週間で過ぎ、二年の二月二十五日、校庭に祭壇を設け、神主を迎えて遥拝がありました。雪の積もった吹きさらしの校庭でのことでした。

祖父は、桑名の税務署に勤めていました。大正十二年の春、桑名から引き取って一緒に生活をするようになりました。その時私の家では、電気で煮たきをしていたので富田の飯を食べると手や足がしびれる、電気で飯を炊くからだと言ったりしたので、大笑いしたこともありました。その祖父はこの年の十月に亡くなりました。

大正の頃の選挙の逸話を少し書いてみましょう。当時は二十五歳以上の戸主で、国税納税者でなければ、投票権は無かったと思いますが、これは衆議院だけだったと思います。町会議員の選挙は、二十五歳以上の男なら出来ました。それぞれの町内から立候補するので、親戚が他の町から出ると困ったことになります。南町から出た加藤氏の責任者だった山本氏の親戚が西町から出るというので、山本氏が疑惑の目で見られていました。当時の投票は、墨で書くことになっていましたが、投票当日山本さんは、「乾かない、乾かない」と投票用紙を吹きながら、立会人に見せて回ったと、後日聞いたことがあります。選挙もなかなか面白かったようです。

現在の国道一号線の一本松から本町の五叉路の線路道までを埋め立てて、旭町ができました。線路から西、酒吉の庫、今の古川まで埋め立てた時、斎宮山から十四南の堤防をジーゼルエンジンのトロッコが五十輛位連なって、一日何往復も、一年か二

年ゴトゴトと土を運んでいました。

本町から一本松まで八間通り（一号線）が出来ました。盆には鯨船はここが練り終わり、大変な賑わいようでした。旭町新地ができ、各町に散らばっていた芸妓、酌婦、置屋がまとまって色町として賑わいを見せ始めたのもこの頃です。

小学校入学当時のこと、浜で地引網をかけると、小若衆が膝切りの半天に縄の帯で学校の廊下を裸足のまま、「網かけたぞよう」とどなりながら走って行きました。すると学校中がにわかにざわめきだし、机のふたをガタガタと閉めて、高学年生が飛び出して行きました。始めのうちは何が何だか分かりませんでした。浜へ網を引きに行ったのだと教えてもらいました。

伊勢電が山田の外宮から桑名まで走りました。その時も生徒たちは学校などどこ吹く風と、開通記念の電車に乗り放題。当時は、お昼になると生徒たちは昼食に家へ帰るのですが、午後になっても男の生徒たちが戻ってこない、不思議に思っていました。先生たちも大騒ぎです。その内、私たちにも男性徒たちの伊勢参宮が伝わってきました。

その頃の伊勢電にはよくストライキがあり、職場放棄で改札が無いのを幸いと、ストの解決時間まで乗り放題でした。しかし解決時間がきたところからお金を取られるというハプニングもありました。いずれも、今の学校では許してもらえないようなのどかな出来事でした。

大正十三年ごろ、富田浜海水浴場に夏季停留所ができました。名古屋から沢山の人が来るようになり、富田浜駅になりました。その頃の列車は、満員で、デッキにも人があふれ、あの大正ロマンのカンカン帽に着物姿の人々が、列車にぶら下がるように乗っていました。機関車は黒煙を吐きながら、喘ぐように走っていたように思えます。

富田浜駅から浜まで、五十メートル位の両側には土産物店が並んでおり、浜には掛茶屋もできて大変な賑わいでした。北から天ヶ須賀、松ヶ浦、富田浜、千鳥ヶ浦、霞ヶ浦、午起と白砂青松の浜がずっと続いていました。名古屋からの唯一の海水浴場でしたので、名古屋の金持ちが別荘を競って建てはじめましたが、その頃の面影は今も残っています。

富田浜へは毎年、館山海軍航空隊の複葉のフロートがついた、可愛い「下駄ばき」と呼んでいた飛行機が五、六機、多くて十機位やってきました。教官は大きな飛行艇で飛んできました。霞洋館で一泊して帰る卒業飛行試験のコースの一つでした。

航空隊が来るのが分かると、小学生は歓迎のため動員されました。見送りとお出迎えに分かれるのですが、やはり出迎えのほうが楽しかった。当時の少年航空隊の方々は幾多の戦いに出られました。今も生存されておられる方がいるだろうか、当時のことを思い出しています。

伊勢湾では海軍の大演習もありました。艦隊が入って来ると、小学校から軍艦見

学の船が出ます。船賃は、五銭でした。私たちの見学は戦艦伊勢でした。漁に使うポンポン船に乗って、戦艦に近づくのですが、波は高いし、縄梯子のような梯子を上るのですから大変でした。やっと上がると、狭い通路に水止の扉の下から三十センチほど鉄板が上がっていて暗いし、後ろからはせき立てられるので、つまずきつまずき見学するのです。船頭さんがいい人で、ついでに潜水艦や航空母艦赤城なども回って見せてもらいましたが、赤城には上げてもらえませんでした。

十四の桜は、昭和三年の御大典記念に植えられました。それから七十年近くになりますが、良い所になったものだと思います。

夏祭りも盛んでした。南町も同十五日、松原天皇社十五、十六日、中町二十日、鳥出神社の蛭子祭二十一日、浜元町観音十八日、古川の地蔵が二十四日で、町の祭も終わりになります。お盆の大祭は旧七月十五日でした。お盆は時によると九月になることもありましたが、神様の祭りも、今は人間様の都合で決められてしまいます。お盆大祭のハイライトは何と言っても鯨船の練り込みで、本当に楽しい思いをしました。

初めてラジオを聞いたのも、南町の山の神の祭のときでした。小学校の玄関に、横八十センチ、高さ一メートル十センチ位の黒い箱が置かれていました。ダイヤルが二、三個付いていて、歌が聞こえる、話し声が聞こえる不思議な箱に釘付けになりました。大人は箱の後ろへ回ってのぞいたりしていました。それがラジオとの初対面でした。

これは電気で音が出るのだなと思いました。もっと小さかったころ今の桜堤の網勘橋のもとに四日市電気富田変電所があって、店の用事で出かける母についていくと、小学校で見たのより大きな黒い箱が、薄暗がりでもうんうんとうなっていたのを見ていたので、分かったのでしょう。でも声が出るのにはびっくりしました。それからまもなく、変電所は現在の十四のところへ変わって行きました。

街道尻の踏切近くで、浜の砂から砂金を採る研究をしている人がいました。渡辺浜次郎さんという方で、富田にもこんな科学心を持った人もいたのです。大東亜戦争のとき海軍の軍属になりましたが、休暇で一度だけ帰ってきたときは日本刀を吊って、大変元気な姿で「南方へ行っていた」と言っていました。その後どうなったのか分かりません。

小学校時代はあまり宿題も無く、のんびりしたものでした。学校から帰ると齋宮山や浜へ遊びに行きました。浜で地引を引いていると、子どもも手伝いました。私も網を引かせてもらい、皆で喜んで食べました。

何年のことかはっきりしないが、トリ貝（アオヤギ）が沢山取れました。スコップでトラックに直積みしてどこかへ運んでいきましたが、今も忘れられないトリ貝のバカ取れでした。

小川鉄道大臣の時、伊勢電の熊沢氏が揖斐、長良、木曾川の鉄橋を国鉄から払い

下げを受け、ロッキード事件のような大騒ぎになりました。この鉄道疑獄で四日市銀行は倒産。この頃から世は不況に走り始めますが、鉄橋を買っておいてくれたので参宮急行になり、関西急行にそして近鉄になり、今の発展につながってきたのではないかという思いがしないでもありません。

代官町の角にタオルの査定場があり、元 NHK のアナウンサー山川静夫氏の祖母が住み込みで勤めてみえました。広い建物が建っており、天カ須賀や南福崎から持ってくるタオルの検査をしていました。私は、山川氏の祖母にあたる人と友達で、雨が降ると査定場で飛んだり跳ねたりして遊んだものです。

山川氏のお母さんは、川越の小学校の先生をしておられたので、袴姿で風呂敷包みを抱えて夕方帰ってこられると、姉さんが帰ったからと私も家へ急いだのを懐かしく思い出します。山川氏の叔母さんは、今どうしてられるのか、一度お逢いできればと願っています。

その頃の物資の輸送は鉄道が頼りでした。富田駅から漁網やタオル、素麺などを運び出し、入ってくるのは東紡の原綿でした。駅からの引き込み線で列車は東紡へ入り、塀の中を黒煙を吐いてピーポーと走るので、中が見たくてのぞいたものです。貨車から荷役が綿花を下ろしてレンガ造りの倉庫へ運び込みます。この蔵は長年地震にも台風にも耐えてきました。東紡の富田工場もいよいよその歴史を閉じるようですが、このレンガ造りの倉は何か活用できないのでしょうか。

小学校の修学旅行は、五年生が伊勢、六年生は奈良と決まっていました。修学旅行から帰って富田駅に着くと駅の中は、印入りの提灯がいっぱいで、何様のお迎えかとびっくりしたものです。提灯を掲げて口々にわが子を呼ぶ光景が思い出されます。

垂坂山に無電の塔が何本も建っていました。第一次大戦の時に中国の青島から持ってきたのだそうです。遠足の度に何度も無電室を見学しました。以前に電灯会社で見た黒い大きな機械がありました。ドイツの製品とのことで、ベルリンオリンピックの「前畑ガンバレ！」で有名な中継はここに受けて全国へ流されたのですが、これは昭和十一年のことでした。

川越道から富田駅まで埋め立てて三岐鉄道が開通したのは昭和六年でした。広場で祝賀会があり、大神楽や芸妓の手舞があり、サーカスや見せ物小屋も並び、大阪相撲も来て賑やかでした。

桑名、四日市間の旧東海道をセダンやフォードの乗用車が定期バスのように走っていました。知った人でないと止まってくれません。四日市から来た叔父が帰る時には、通り道まで送っていき、手を上げて止めたものです。それから間もなくして今のバス型になりましたが、四日市祭にはぎゅうぎゅう詰めで走っていました。北村の桜堤から三滝橋の手前まで五銭でした。

鳥出神社の東、宮町の踏切りの東に路切りの東に私立の幼稚園と技芸女学院がありました。裁縫、手芸、お花とお茶などを教える女子ばかりの学校で、私も三年間袴

姿で通いました。富洲原女学校が出来までの女子教育のかなめでした。

その頃は、春になると長興寺のお釈迦さん、四月になると海山道、加佐登の春祭がありました。長興寺のお釈迦さんは、入る道が狭いのに出店がいっぱい出て、押し合いへしあいの大賑わいでした。

昭和九年の五月に伊勢大橋が出来ました。この夏の暑い午後、友達と富田浜へ遊びに行きました。海のほうを見ると大きな橋が架かっており、橋の上を自動車や自転車が走り、歩く人も見えます。まるで映画のような光景が海の上に展開されています。みんな驚いてみると、中の誰かが「伊勢大橋」だといいましたので、やっと分かりました。蜃気楼なのです。伊勢湾に蜃気楼が出ると言うことは、富田小唄にも伊勢音頭にもありますが、実際に見たのは初めてのことでした。

その頃、富田浜には保勝会、がありました。富田の上流家庭の旦那衆の集まりで、富田の絵はがきや、郵政省の許可を取った蛤形の木製の郵便はがきを作り、海水浴の期間中、当番で出て売っていたのを思い出します。

王道楽土の大陸へと軍靴の足音が高まる時代になってきました。富田町にも師団演習があって、小学校の校庭に馬が何十頭と来て、馬小屋が建ちました。四日市屋が師団の司令部で、番兵が立っていました。町の大きな家には二三人、四五人と兵隊が泊まります。その頃は風呂のある家庭はまれで、銭湯を借り切って入浴していました。そして朝早くから斎宮山へ垂坂山へと演習に出かけ、その小銃の音で起こされたものでしたが、軍隊が泊まった後数日は馬の臭いが残るのでした。

戦いはしだいに激しくなってきました。夜中に軍用列車が通ることになると、駅から役場に通知があり、大きな太鼓をドンドンと鳴らして知らせてくれます。当時私は女子青年団の団長をしていましたが、その音を聞くと飛び出して駅へ駆けつけたものです。長い長い列車で、ホームにおさまらないこともしばしばありました。暑い盛りには、ホームからはみ出した機関車の運転士に氷水をあげたことも度々ありました。

その頃の列車は窓が開けられるので、女子青年団がいると兵隊は喜んでくれました。元気いっぱい張り切っている人、しみりと淋しそうにしている人、人さまざまでした。いつも聞かれるのは「ここはどこですか」、私が聞くのは「どこの師団ですか」。手紙の投函を頼まれることもありました。切手を貼り忘れた手紙もあり、黙って切手を貼ってポストへ入れます。いよいよ発車となると、窓から落ちそうになるほど身を乗り出して元気いっぱい日の丸の旗を振る人がいるかと思うと、最後尾のデッキでは泣いている人もいて、出征する人も銃後を守る私たちも一生懸命でした。

出征の見送りは度々あり、久居の陸軍病院へ白衣の兵士の慰問にも何度も行きました。そして町には戦死の弔問が所々に立つようになり、戦死者が一定の数になると小学校の講堂で町民葬が行われるのでした。

事変は日に日に大きくなって、大東亜戦争になってしまい、やがて本土攻撃が始まりました。寝る間もなく、物資は欠乏し、米に始まり魚、酒、煙草そして布地まで配給制になり、窮屈な生活になりました。その頃、国防婦人会や女子青年団は勤労奉仕によく出て行きました。網罫製網の第二工場へ戦車の偽装網の房付けに行ったり千人針を持って廻ったり、銃後もゆっくりする暇もなく慌しい毎日でした。

昭和十六年二月十一日に、富田町は四日市市に合併しました。様々なお祝い事があったのですが、ちょうどその頃、母の病状が悪化し参加することが出来ませんでした。どなたかその時の様子をお書きいただければと思っていますが、翌十二日に母は亡くなりました。小さな妹がいましたので、皆と一緒に活動できなくなり、女子青年団長も止めて家庭に入りました。

しかし今度は母の代わりに国防婦人会の仕事に出て行かなければならず、出征兵士の見送りや多度神社への武運長久のお参りなどが度々ありました。近くの鳥出神社へは日参をします。早い時間に参詣しようと競争で、夜中の二時、三時に順番で二人ずつ組になってお参りに行くのですが、どんなに早く行っても老人や婦人に出会うので、こわいと思ったことはありません。雪の日などはちょっとつらかったが、兵隊さんのためと思って元気を出したものです。

防空演習にも出て行きます。縄のはたきで火を叩き消す、竹槍でヤヤッ。はたきや竹槍がなんの役に立ったでしょう。気休めでした。本当に爆弾が落ちてくるようになったら、安全な場所へ逃げるにこしたことはありません。幸い私方には十志に田や畑に囲まれた隠居所がありましたので、次の妹と小さい妹を泊まりに出してやり、父と私とで家を守りました。そして一週間に一度だけ次の妹に代わってもらい十志へ泊まりに行くのですが、その時だけはモンペを脱いでゆっくりと寝られたものです。

その一週間に一度の泊まり番の夜が四日市の空襲でした。近くの田や畑に焼夷弾が落ちる、東のほうにも落ちるのが見えましたが、火の手は上がりず海へ落ちたらしいのです。

そして八月十五日、ラジオは朝から、正午に重大放送があると伝えました。まさか負けるとは思っていないがなんだろうかと午前中そわそわしていました。重大放送は終戦の勅語でした。ちょうど富田盆祭の最中のことで、兵隊に行く前の若い衆が、なんや負けたんか、やけくそやで、いまからくんじゃぶね（鯨船）出そっかや、と言って通って要ったのを五十年経った今でも鮮明に思い出します。

完